



## DEREK LARSEN

### 自分が楽しいと思うものを焼き続けたい

沢山のアーティスト的な作品が並ぶギャラリーで彼の作品は決して派手なものではない。ただ彼の器を手にとった時は不思議とこの器に自分ならば何を盛るだろう、そう考えてしまう。持ち手に自然とイメージを掻き立てる、そんな不思議な力が彼の器には存在する。

アメリカから日本に来られた経緯、陶芸家として何を大切にされているのか、たっぷりお伺いしました。Derekさんのインタビュー記事ぜひお楽しみください。

## 京都の清滝の工房にて

### 陶芸を始められたきっかけは？

アメリカのカンザスで特段芸術一家に生まれたわけでもなかったし、小さい頃から陶芸家になりたかったわけでもなかった。器を初めて作ったのは高校の時で、初めは趣味の延長に過ぎなかった。“陶芸家＝立派な職業”なんて考えはカンザスではありえなかったし、大学で陶芸のクラスを受けて、ギャラリーや美術館に足を運んだりもしたけど、当時の自分にはどうしても陶芸家が現実的な職業と思う事ができなかった。親にも反対されていたし、大学では農業の勉強をして、先生になろうとか、色々考えたけど、どれもピンと来なくて大学では遊びほうけてしまっただけ。父には“遊び呆けている奴の学費はもう払わない”と言われる始末。だからその後はステーキハウスでシェフとして働くことにしたんだ。ただその時のボスがまーいろいろと問題がある人でね(笑) シェフとして働いて2年が過ぎた時、もう一度大学に戻ろうと思ったんだ。ただ戻るからには今度はちゃんと陶芸の勉強をしてアートを仕事にしようと思ったんだ。大学で出会った先生の存在も大きくて、たとえばアーティストにはなれなくても、彼みたいにアートを教えることを仕事にするのもありかなって思ったよ。

### オーストラリアに行かれたのはどうしてですか？

大学で無事にデザインの学位は取れたものの、自分の窯があるわけでもないし、陶芸で食っていけるなんてもってのほか。結局、煙突クリーニングの仕事やバーで働いてお金を貯めながら、弟子入り先を探していたね。そんな時“薪窯コンフェランス”というイベントがあって参加してみたんだ。そこでオーストラリアの穴窯の留学のプログラムを知って申し込むことにしたんだ。オーストラリアでは穴窯はもちろんのこと、自身で釉薬のテストをしたりと沢山勉強したよ。恐ろしく長い論文もなんとか書き終えて無事に修士号をとれた。そのおかげでカンザスで一番若い教授として働けることになったんだ。28歳の教授だよ。家族も大喜びで凄く安心してた。それなのにたった5年で辞めて日本に行っちゃったけどね。

### 日本の陶芸との出会いは？

高校ではガス窯しか使うことができなかったんだけど、どうしてもガス窯から出てくる色が退屈に思えて好きにはなれなかった。それで大学では短時間で出来ることに魅力を感じて楽窯を使っていたんだけど、先生から“楽窯を使うなら、楽茶碗のことも勉強してみろ”って言われたんだ。それで大学の図書館にいて20冊くらい関連する本を読み、その後は信楽、志野、丹波と次から次へと本を読んでいった。なんて表現したらいいかわからないけど、“ああ、これだ”って思えたんだ。美しい女性に出会った時みたいだね。今まで自分が見てきた陶器じゃなくて、自分はこれを作るべきだったんだって思えた

んだ。今までの陶器に感じたことのない、すごく自然で、魂のこもった、まるで山にいるような感覚を与えられたんだ。

先生にその興奮を伝えると、”ボロボロの煉瓦ならあるぞ”と言われたんだ。だからそれを使って初めて自分の穴窯を作ることになった。もの凄く小さい窯だったけど、そこで毎週毎週窯焚きをして実験を重ねて少しずつ原理を理解していった。鉄があるとかいう色になるとか、カルシウムがあるとかになるとかね。小さい窯だったから実験がしやすく、毎月違う木や土、焼成時間も変えたりして色々試してみた。その中でいいものができたらメモをして、それにプラスαをして実験をし続ける。僕にとってこれがすごい勉強になった。だいたいの陶芸家は先生がいて先生の通りにつくる。先生の枠から抜け出したり、失敗したりするのを恐れる。大人になればなるほど、失敗できる機会は少なくなるからね。ディナーパーティーに向けてのお皿、新しく挑戦して作ってみただけど失敗しちゃったっなんてもう言えないでしょ(笑)

## 日本にはどのようにして来られることになったのですか？

初めて日本の陶器を見た時から自分に染み付く様な感覚を覚えてすぐに虜になった。日本の陶器について書かれた本は全て読み尽くしてしまって、もう本だけじゃ勉強できないってところまで来たんだ。そんな時、ちょうど日本で働いていた友人が帰国して、僕がインターネットで買って持っていた木箱の日本語を読んでくれたんだ。彼に“絶対おまえは日本に行くべきだ。もう30歳いくつだろ？もう少し経つと行きたいと思った時に、いつでもどこにでも行ける年じゃなくなるんだ”てね。その言葉もあって当時32歳で日本に行くって決めたんだ。そこからJETという日本で英語を教えるプログラムに申し込んだ。僕以外みんな日本語ペラペラで、なんで仕事もらえたのかなと正直思ったね。ただ恐らく少し年上だったことや、大学で教えていた経験をかってもらえたんだと思う。それで配属されたのがまさかの愛知の1000人くらいの小さな村だった。都会は自分には合わないし逆に良かったよ。毎週末、常滑、瀬戸、美濃、京都や大阪に行って、陶芸の勉強をして、東京の展示会にこれでもかかってくらい行って色々な作家さんに直接会って話を聞いたんだ。その甲斐あって6か月で登り窯を使わせてもらう場所を見つける事ができて、薪割りを手伝って、仕事の合間に自分の作品を焼くことができた。彼とは一緒に展示会もして、僕にとってはそれが日本で初めての展示会になった。それから彼が穴窯を作りたいというから、一緒に窯を作ったりもしたね。

## 日本に来て一番苦労したことは？

やっぱり日本語かな。小さな村に住んでいたからとくに教科書に載っている日本語と日常で聞く日本語が違いすぎて大変だったよ。ただ僕は外国人同士で固まって飲みに行ったりはしなくなかったから代わりに毎週窯焚きを手伝ってみんなで鍋を食べてビールを飲んでた。ただズボンのポケットにはいつも必ずメモ帳を入れていて、新しい日本語を聞いたら必ずメモしていたかな。それを繰り返しているうちに少しずつ日本語が分かるようになってきた。

## 作品のインスピレーションはどこから来るのですか？

昔は桃山時代のものとか、古い作品からだった。でも今は少し変わったかな。古い作品は素敵だけど、過去の作品に囚われて、模作を作り続けるのは違うと思うんだ。自分も実際に模作を作り続けていた時期もあったけど今は日常からインスピレーションを受けるようになった。何かを作るなら自分が好きで楽しいと思えるものを作りたいからね。これには少し裏話があってね。7年前に黒田陶苑に自分の作品の売り込みに行った時に茶道具ばかりを何十点も持っていったんだ。そしたら黒田さんに“何で茶道具ばかりなんだ？そんなに茶道が好きか？”と聞かれて、思わずに“これがあなたがみたいものだと思ったので”と言ったんだ。そしたら“今度はお皿や酒器を見せに来て”と言われたんだ。翌月皿と酒器を持って店に行くと、“あなたは茶道か、飲んだり食べたりするのどちらが好きなの？”と聞かれたんだ。それでハツとしてね。“確かに自分はお手前とかよりも、好きな友達を呼んで、手作りの皿や酒器でご飯やお酒を楽しむのが好きだなんて。凄く大きなターニングポイントだったかな。シンプルに自分が好きなものを焼いたらいいんだって気づくことができたんだ。それから銀座で自分のお皿を展示してもらえるようになって料理人に自分のお皿を見てもらう機会をもらえたんだ。料理人が自分の皿をまじまじと見て、このお皿に何を盛ろう、どんな食材を使おうとか、イメージが駆り立てられているのを見るのは凄く面白いね。僕はいいお茶碗には何が求められているのかが正直ずっと分からなかった。でもお皿は魯山人が“器は料理の着物だ”って言ったように、料理を引き立てることができるのいいお皿だって分かってるんだ。だからこそ作るのも凄く楽しいんだ。器は静かにその魅力を表現する。その考え方も好きなんだ。茶道を理解するのは人生の一生を賭けて理解するんだって茶道の先生に言われたけど、僕は皿もそうだと思う。でもお茶会に通い続けるのではなくて、日常にご飯を食べて、お酒を飲んで、そんな中でどんなお皿がいいのかを勉強する。そういう勉強の仕方もお皿にはあると思うんだ。僕は箱に入れて大切にしまわれる作品ではなくて、日常にいつも使われる器が作りたいたいと思ってるんだ。年をとったのもあるのかな？今は静かな作品により魅力を感じるようになったんだ。

## 奥様とはどうやって出逢われたのですか？

愛知で穴窯を作り終わって英語の仕事も終えてビザがいよいよ半年で切れるって時に、自分が陶芸を続けていくにはどうすべきかを考えていたんだ。だから愛知で知り合った陶芸のグループから離れて、別の土地で一度一人で挑戦してみようと思ったんだ。1年と期間を決めてもう1度展示会をやって、失敗したらアメリカに帰ろうって。それで信楽に行くことにしたんだ。香澄とはその時に出会ったんだ。彼女は、“自分の作品を全部ガラガラ(スーツケース)に詰めて、東京とか京都に行って、展示会がしたいって売り込みに行くのよ”と言ってくれたんだ。アメリカではそんなことをしないから衝撃を受けたけど、そのおかげで日本での生活がどんどん良くなっていったんだ。

## 外国人として日本の作品を作ることを批判する人はいましたか？

昔の展示会で、“お前みたいな日本人の血筋もない奴に日本の作品が作れるか”と怒鳴られたことがあったよ。展示会のスタッフもびっくりして何も言えなくて、僕もびっくりして“すみません”しか言えなかった。今だったらもっと別の反応ができたのかなって思うけどね。でも逆にじゃあ日本人はジャズを演奏できないのか？三食全て和食を食べないといけないのか？着物や袴を着続けるのか？そうじゃないだろうって。現代はいろんな文化が混じり合った世界でだからこそ面白いんだ。ただ僕は日本の伝統文化を守り続けることがどれだけ大切なのかを誰よりも分かっている。どんなに素敵な伝統も守ろうとしなければ簡単に無くなってしまおうし、僕はそうってしまった文化を沢山見てきたから更にそう思うんだ。たまに考えるんだ。僕らが死んで、息子がもし陶芸をしていたら、息子の時代にはまだ穴窯で焼いた陶芸を欲しいと思う人がいるのかな。むしろ穴窯が何か、焼物が何か知っているのかなって。まだ茶道や和食の文化があるのかなって。文化は変わっていくものだからね。話が少しズレたけど、カタカナの作家名が焼物の展示会に出てくるとびっくりする人や、外国人にはできないって思う人もいるけど、今までもいろんな世界から日本文化を学びにくる人がいて大きなブームもあった。僕は最初の間でもないし、最後の人間でもない。ただ僕は短期間、日本で弟子入りをして帰国するのではなく日本に居続けて焼物をしている。それが大きな違いだと思っている。

## 陶芸をしていてどんな時にやりがいを感じますか？

二つあるかな。一つは想像していた通りの作品もしくはそれ以上のものができた時。でもその感動は長く続くものじゃないよね。多分1週間くらいかな(笑)特に10何年もしてると“できたぞっ！”で感動はどんどん短くなるんだよね。もう一つはお客さんが喜んでくれた時かな。一人、東京の展示会で来てくれたお客さんで今も覚えている人がいるんだけど、その当時は大きなビール用のカップを作って展示してたんだ。そしたらそのお客さん”うわー！ずっとこんなのが欲しかったんだ”と言ってきて、その展示会中一度も置かずにずっとそのカップを持ち続けてたんだよね。こういう喜びって計画してできるものじゃないからね、すごく嬉しかったよ。

## 今後挑戦したいことはありますか？

去年は大きなプロジェクトとして信楽ではなく京都の土を使うことに集中していたんだ。最近唐津や萩の土を使ってテストをしてみたりと、新しい素材を使って新たなインスピレーションを得ようとしています。今は失敗する時間がないくらい、作品作りに追われているので、新しい窯を作ったり、模作でないオリジナルの楽茶碗を作ってみたりとか、もっと失敗をして、実験的な、ちょっと遊び心のあることをできたらなと思っています。僕は陶芸家庭に生まれたわけでもないし、先輩や後輩がいるわけでもない。何焼という代名詞に拘らず、Derek焼を貫いていけたらと思っています。